投稿

東京都の離島における中高生の飲酒行動に関する調査

小林 冬子（コバヤシ フユコ）＊1　大井田 隆（オオイダ タカシ）＊2

目的　東京都の離島，A島において，平成10年度に子どもの飲酒に関する実態調査が養護教諭らによって行われた。その調査では，A島は飲酒に寛容であり，その飲酒環境による弊害が子どもたちにも影響を及ぼしている可能性があると推測している。しかし，その実態調査の結果は，A島特有のものであるのかは不明である。そこで今回，A島の状況を客観的に判断するために，全国調査と同様のアンケート調査を実施し，更に，中学校と高等学校の養護教諭へのインタビュー調査とあわせて，A島における未成年者の飲酒行動や保健室から見た現状を客観的に検討し，A島におけるアルコール依存症の一次予防に役立てることを目的とした。

方法

1．養護教諭へのインタビュー調査　今回「未成年の飲酒行動に関するアンケート調査」に協力してもらった中学校全4校と，高等学校全1校の養護教諭5人に行った。調査期間は平成13年1月11日から平成13年1月12日であった。

2．未成年の飲酒行動に関するアンケート調査　東京都A島にある全ての中学校及び高等学校の生徒を対象とした。調査期間は，平成12年11月1日～平成12年11月30日であった。

結果　アンケート調査の結果から，①A島の中高生の飲酒率は，全国調査と比較して大きな差はなかった，②飲酒頻度と飲酒量との関連において，飲酒頻度が高く飲酒量も多い，リスクの高い飲酒をしているものが24.5%であった，③飲酒を親に見つかっても叱られたことのないものが81.4%であった，④初めて飲酒した年齢について，「8歳以下」と回答したものの割合が，全国調査より高かった，ということがわかった。また，インタビュー調査の結果から，①飲酒問題を指導する上で，親の意識を問題視しており，その背景には，A島の飲酒に寛容な環境があると考えている，②飲酒教育を行うには，養護教諭自身の意識の持ち方が影響する，③飲酒問題に関して，関係機関のネットワークの必要性を感じている，ということがわかった。

結論　A島が特にアルコールに対して寛容な環境であると断言はできないが，親は子ども達の飲酒に対して寛容であると推測される。今後，親自身が子どもの飲酒に対してどのように考えているか意識調査が必要といえる。また，リスクの高い飲酒をしている中高生に対し，具体的にどのような指導や支援を行っていくのか，更なる調査及び検討が必要である。そして，地域全体でアルコール関連問題に対応していくための，ネットワークづくりが重要な課題といえる。

キーワード　飲酒問題，未成年，離島，一次予防

Ⅰ はじめに

東京都の離島（A島）の養護教諭（小中学校）で組織された，「A町立小中学校保健部会」は，小中学生における飲酒行動の問題を指摘する声があったことから，平成10年度に「お酒につい

＊1 東京都衛生局健康推進部母子保健課保健婦　＊2 国立公衆衛生院公衆衛生行政学部部長

てのアンケート調査」を小中学生（小学校５年生～中学校３年生）を対象に実施した。このアンケート調査は「お酒を飲んだ理由の中に『家族や親戚の人のすすめ』で口にする子どもがおり，このことは低年齢化の要因の一つであると考えられる。本来，善悪やけじめを教え，子どもの成長発達に責任を持つべき立場にいるはずの大人の良識が問われている。また『間違って飲んだ』という理由もあり，見た目はジュースかと思えるような商品が出回っていることや，やはり家庭内で飲酒が日常化し，容易にアルコールに手が届く状態になっていることが考えられる。」と報告しており，さらに，Ａ島特有の飲酒環境とそれによる弊害について，「一つは島という物理的に狭い生活環境での人間関係の難しさからくるストレス，もう一つは，これらのストレスを解消するための娯楽，文化施設，運動施設が少ないことも飲酒の習慣に関連しているのではないか，という医療専門家の見方がある。」とも報告している[1]。そして，Ａ島特有の飲酒環境とそれによる弊害が，子どもたちにも影響を及ぼしているのではないかと推測している。

また，Ａ町立小中学校保健部会の学習会や事例検討会を保健所内で行う中で，養護教諭がアルコールに関する様々な問題の対応に苦慮していることを，保健所職員に対し報告しているのが現状である。

Ａ島での子どもたちのアルコールに関する意識や状態については，このアンケート調査からある程度は推測されるが，このような状況がＡ島の子どもたちに特有な環境や状態なのか，あるいは全国的な状況なのかがわからない。そこで今回，Ａ島の状況について客観的に判断するために全国調査と同様のアンケート調査を実施し，さらに，中学校と高等学校の養護教諭へのインタビュー調査とあわせて，Ａ島の未成年者の飲酒行動や保健室から見た現状を検討した。

また，菊地は「これからの保健所はアルコール問題についても消費状況や生活習慣，問題の発生状況などに関して，総合的な調査を行うと共にアルコールに対する人体への影響の情報をリアルタイムでつかみ，住民や関係者に情報を提供する課題が求められているのではないかと思われる。」[2]と述べている。今後，保健所が果たすべき役割であるアルコール依存症の予防活動について，Ａ島ではどのようなことが求められているのか，またＡ島は本当にアルコールについて寛容なのか，未成年者の飲酒に対する意識や行動を全国調査と比較する形で検討することにした。

Ⅱ 調 査 方 法

（１） 養護教諭へのインタビュー調査

1） 調査対象および調査内容

① 調査対象

今回「未成年の飲酒行動に関するアンケート調査」に協力してもらった中学校全４校と，高等学校全１校の養護教諭５人に行った。調査期間は平成13年１月11日から平成13年１月12日であった。

② 調査内容

①飲酒問題の状況，②飲酒問題の指導で困っていること，③地域との連携について，④飲酒教育に関する学校の状況，⑤保健所に期待すること，についておりまぜながら，学校の現状について自由に話してもらった。

2） 調査の実施

① 調査手順

アンケート調査を行った中学校・高等学校の養護教諭５人へインタビュー調査を依頼し承諾を得た。各校へ著者が訪問し，調査内容について，自由に回答してもらった。了承が得られた３人については会話をテープレコーダーに録音した。他２人については，会話のメモをとるのみとなった。

② 分析方法

テープレコーダーに録音した会話を書きおこしたものと，会話のメモからインタビューの内容を調査内容の５つの項目とその他に分類し，検討した。

（2） 未成年の飲酒行動に関するアンケート調査

1） 調査対象および調査内容

① 調査対象

調査は東京都A島にある全ての中学校および高等学校の生徒を対象とした。中学校は町立中学校の4校，高等学校は都立高等学校1校である。調査期間は，平成12年11月1日～平成12年11月30日であった。

② 調査内容

「未成年者の飲酒行動に関する実態調査」研究班，主任研究者，国立公衆衛生院疫学部長・簑輪眞澄が行った「1996年度未成年の飲酒行動に関するアンケート調査」[3]のアルコールに関する質問1から質問34までを使用し，全国の状況とA島の現状の比較をすることにした。

表1 5校の養護教諭へのインタビューのまとめ

① 飲酒問題の状況
生徒の飲酒問題 ある 3校
生徒の飲酒問題 なし 2校
問題の内容としては
・二日酔いで授業が受けられず保健室で過ごす
・運動会などのあとでうちあげをして仲間と飲酒している
・中学生が小学校の校庭でビールを飲んで空き缶を散らかしてくる
・飲酒による内科的疾患がある生徒がいる

② 飲酒問題の指導で困っていること
・親の意識→親が子供と一緒に飲んでいる。未成年の飲酒について罪悪感がない。
・時間的余裕がない→養護教諭が指導する時間の枠をとること。
養護教諭自身が準備を含めて時間をとれないこと。
・地域社会が飲酒に寛容なこと。
・飲酒問題の指導を熱心にやると人間関係が悪くなる。

③ 地域との連携について
・保護者にアルコール問題があるとき
・家庭の問題から飲酒問題が生じているとき

④ 飲酒教育に関する学校の状況
今年度，何らかの形で飲酒教育を行っているか。
養護教諭が授業を行う機会がある 1校
保健体育の授業で行われている 1校
行われていない 3校
今年度飲酒について個別指導をしたことがあるか。
ある 2校
ない 3校
アルコールについて他の教員と協力して行うことはあるか。
ない 5校

⑤ 保健所に期待すること
・講習会や情報提供をして欲しい
・親たちに対する啓発をしてほしい
・学校で困っていることを気楽に相談したい
・関係機関のネットワークが欲しい
・健康教育に必要な情報の提供や教材の貸し出し

2） 調査の実施

① 調査手順

東京都教育庁A島出張所及びA島町教育委員会を通し，各校の校長に調査協力を依頼し，承諾を得た。調査票は郵送にて各校の養護教諭へ送り，担任に配布してもらい，各担任がホームルームの時間を利用して各教室にて調査を実施した。生徒は自記式無記名の調査票を記入後，同時に配布したのりつき封筒に調査票を入れ密封した。

実施に際しては，生徒の調査票記入中に席を回ったり，のぞき込んだりしないことや，ありのままを素直に書くこと，教師はアンケートを開封しないのでプライバシーは守られることを伝えてもらうように，実施の手引きを配布した。担任教師は封筒を回収後，開封せずに，養護教諭に渡し，養護教諭から，そのまま学校単位で国立公衆衛生院へ返送してもらった。

② 集計解析

SPSS 9.0j for windowsにてクロス集計を行った。

③ 回収状況

中学校全4校および高等学校全1校にて回収した。回収数は中学校が生徒数306人で，295通回収された。高等学校が生徒数259人で，245通回収された。回収率は，中学校が96.40%で，高等学校が94.59%であった。

III 結 果

（1） 養護教諭へのインタビュー調査

「未成年の飲酒行動に関するアンケート調査」に協力してもらった5校の養護教諭に，保健室から見た学校の現状について，飲酒問題を中心に自由に話してもらった。その内容を以下の5つの項目についてまとめた（表1）。

1） 飲酒問題の状況

最近，生徒の飲酒問題が「ある」と回答したものは3校で，飲酒問題は「ない」と回答したものは2校だった。問題の内容としては，飲酒問題が「ある」と回答した3校とも二日酔いで授業が受けられず，保健室で過ごす生徒がいる

ということをあげていた。また，運動会などの行事のあとでうちあげをしている，という話を聞くといったことは，５校すべての学校であげられた。その他，小学校の校庭にビールの空き缶が散乱していて，「中学生がやった」と苦情が学校に来たことや，飲酒が常習化していて，消化器症状を訴えて来る生徒がいるなどの問題があった。

2)　飲酒問題の指導で困っていること

５校全ての学校で親の意識について話があった。生徒たちとの会話から，親と一緒に飲んでいることがよくあるということがわかり，未成年の飲酒についての罪悪感が親の方に欠けていることを，また，飲酒に対する意識では地域が寛容であるということも，５校の養護教諭があげていた。飲酒問題に積極的に取り組むことで，人間関係が悪くなることも困ったこととして，一方，養護教諭自身の問題として，時間的に余裕がないことがあげられていた。これは，学校のプログラムの中で養護教諭が時間の枠をとることが難しいこと，その時間が取れても準備する時間がないことを指摘していた。

3)　地域との連携について

保護者にアルコール問題があるときなど，学校からの対応だけではどうすることも出来ず，どうすれば良いのかもわからず困ることがあり，また，アルコール問題に関わらず家庭内の問題から生徒の飲酒問題が生じていると判断するときなど，民生委員や福祉との連携の必要性を感じる，と話していた。

4)　飲酒教育に関する学校の状況

飲酒教育については，今年度，養護教諭自身が授業を行ったところが１校，保健体育の授業で行われているところが１校，特に飲酒教育を行っていないところが３校であった。今年度，個別指導をしたことが「ある」が２校，「ない」ところが３校であった。また，アルコールについて，他の教員と協力して行うことはあるかについては，「ない」が５校であった。

5)　保健所に期待すること

５校すべての養護教諭が，親たちに対する啓発をしてほしいということを指摘していた。その他，情報提供や講習会，健康教育に必要な情報や教材の提供などの必要性を，また，アルコール問題に限らないことでは，困っていることを気楽に相談したい，関係機関のネットワークがほしいことを述べていた。

（２）　未成年の飲酒行動に関するアンケート調査

1)　対象者の概要

表２のとおりである。

2)　飲酒頻度

「飲まない」と回答したものが，中学で男子43.8%，女子56.0%，高校で男子25.0%，女子31.1%と，ともに全国調査（中学で男子39.1%，女子45.9%，高校で男子24.1%，女子29.8%）よりもわずかに高い割合だった（表3-1，表3-

表２　対象者概要

	中学生	高校生
生徒数（人）	306	259
回収数（件）	295	245
回収率（%）	96.40	94.59
有効数（件）男	153	108
女	141	135

表3-1　飲酒頻度（中学生）

（単位　%）

	全国		A島	
	男 n=21,471	女 n=21,327	男 n=153	女 n=141
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
飲まない	39.1	45.9	43.8	56.0
年に1，2回	38.6	37.8	37.9	34.8
月に1，2回	15.3	11.2	13.1	6.4
週1回以上	6.5	3.9	5.2	1.4
無回答	0.5	1.2	—	1.4

資料　全国：「1996年度未成年者の飲酒行動に関する全国調査」（主任研究者　養輪眞澄）

表3-2　飲酒頻度（高校生）

（単位　%）

	全国		A島	
	男 n=35,645	女 n=37,371	男 n=108	女 n=135
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
飲まない	24.1	29.8	25.0	31.1
年に1，2回	29.3	38.0	32.4	28.1
月に1，2回	31.6	25.3	24.1	33.3
週1回以上	14.4	6.3	17.6	7.4
無回答	0.6	0.6	0.9	0.1

資料　表3-1に同じ

2)。一方,「年に1, 2回」,「月に1, 2回」,「週に1回以上」と回答するものは,中学では男子,女子ともに全国調査より低い傾向にあったが,高校では,男子が「年に1, 2回」が32.4%,「週に1回以上」が17.6%,女子が「月に1, 2回」が33.3%,「週に1回以上」が7.4%と全国調査(男子「年1, 2回」29.3%,「週1回以上」14.4%,女子「月1, 2回」25.3%,「週1回以上」が6.3%)よりも高い割合だった(表3-1,表3-2)。

3) 飲酒量

「飲まない」と回答したものが,中学生では男子30.0%,女子34.8%と,ともに全国調査(男子28.4%,女子31.5%)よりも高い割合だったが,高校では男子20.4%,女子13.3%と,全国調査(男子14.9%,女子16.0%)より女子の割合が低かった(表4-1,表4-2)。「コップに1杯未満」,「コップに1～2杯」と回答したものが,中学,高校とも全国調査より低い傾向にあり,「コップに3杯以上」と回答したものは中学では19.0%,女子8.5%,高校では男子50.5%,女子34.8%と,全国調査(中学男子8.1%,女子4.1%,高校男子39.1%,女子22.1%)より,ともに高い割合だった(表4-1,表4-2)。

4) 親に飲酒をすすめられたことの有無

親に飲酒をすすめられたことの有無について,「ある」と回答したものが,中学で男子30.7%,女子29.1%,高校で男子38.0%,女子31.9%で,

表4-1 飲酒量(中学生)

(単位 %)

	全国		A島	
	男 n=21,471	女 n=21,327	男 n=153	女 n=141
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
飲まない	28.4	31.5	30.0	34.8
1杯未満	38.1	46.3	34.0	41.8
コップに1～2杯	24.9	17.7	17.0	14.2
コップに3杯以上	8.1	4.1	19.0	8.5
無回答	0.5	0.4	0.0	0.7

資料 表3-1に同じ

表4-2 飲酒量(高校生)

(単位 %)

	全国		A島	
	男 n=35,645	女 n=37,371	男 n=108	女 n=135
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
飲まない	14.9	16.0	20.4	13.3
1杯未満	17.4	30.9	11.2	25.2
コップに1～2杯	28.2	30.7	17.8	25.9
コップに3杯以上	39.1	22.1	50.5	34.8
無回答	0.4	0.3	0.1	0.8

資料 表3-1に同じ

表5-1 親に酒をすすめられた(中学生)

(単位 %)

	全国		A島	
	男 n=21,471	女 n=21,327	男 n=153	女 n=141
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
ある	31.4	28.1	30.7	29.1
ない	52.5	58.1	46.4	53.2
おぼえていない	15.0	13.1	22.2	15.6
無回答	1.1	0.7	0.7	2.1

資料 表3-1に同じ

表5-2 親に酒をすすめられた(高校生)

(単位 %)

	全国		A島	
	男 n=35,645	女 n=37,371	男 n=108	女 n=135
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
ある	41.5	37.8	38.0	31.9
ない	42.0	47.3	45.4	51.1
おぼえていない	15.9	14.3	15.7	17.0
無回答	0.6	0.6	0.9	0.0

資料 表3-1に同じ

表6-1 初めて飲酒した年齢(中学生)

(単位 %)

	全国		A島	
	男 n=21,471	女 n=21,327	男 n=153	女 n=141
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
未経験	22.7	25.3	20.3	22.0
8歳以下	23.3	21.9	37.9	35.5
9歳以上	50.6	50.8	41.8	42.5
無回答	3.4	2.0	—	—

資料 表3-1に同じ

表6-2 初めて飲酒した年齢(高校生)

(単位 %)

	全国		A島	
	男 n=35,645	女 n=37,371	男 n=108	女 n=135
総数	100.0	100.0	100.0	100.0
未経験	10.5	11.2	15.7	6.7
8歳以下	18.2	17.3	26.9	27.4
9歳以上	69.3	70.0	57.4	65.9
無回答	2.0	1.5	0.0	0.7

資料 表3-1に同じ

全国調査（中学男子31.4%，女子28.1%，高校男子41.5%，女子37.8%）と比較してもほとんど同じか，低い割合だった（表5-1，表5-2）。

5） 初めて飲酒した年齢

「8歳以下」と回答したものが，中学では男子37.9%，女子35.5%，高校男子26.9%，女子27.4%と全国調査（中学男子23.3%，女子21.9%，高校男子18.2%，女子17.3%）と比較して高い割合だった（表6-1，表6-2）。

6） 飲酒量と飲酒頻度との関連

飲酒量が「3杯以上」と回答したものが，532件中143件（26.9%）を占め，そのうち，飲酒頻度が「週1回以上」と回答したものが24.5%だった（表7）。

7） 飲酒量と家族（父親，母親，兄，姉）の飲酒との関連

「父親の飲酒」や「母親の飲酒」との関連について，「飲まない」と回答したものに比べて，「2杯以下」，「3杯以上」と回答したものでは，父親や母親は飲まないものの割合は減少し，飲んでいるものの割合は増加していた（表8，表9）。

また，「兄の飲酒」や「姉の飲酒」との関連について，「飲まない」と回答したものに比べて，「2杯以下」，「3杯以上」と回答したものでは，酒を飲んでいる兄や姉がいると回答しているものの割合は増加し，兄や姉が酒を飲まないものの割合は減少していた（表10，表11）。

8） 飲酒量と友だちの飲酒との関連

「飲まない」と回答したものに比べて，「2杯以下」，「3杯以上」と回答したものでは，「酒を飲む友だちがいる」割合は増加し，「酒を飲む友だちはいない」割合は減少していた（表12）。

9） 飲酒量とクラブ活動の参加との関連

「飲まない」と回答しているもののうち，クラブ活動に「参加している」が84.3%，「参加して

表7 飲酒量と飲酒頻度との関連

飲酒量	飲酒頻度			
	総数	飲まない	月に1，2回以下	週1回以上
飲まない(件)	135	134	1	—
(%)	100.0	99.3	0.7	—
2杯以下(件)	254	76	173	5
(%)	100.0	29.9	68.1	2.0
3杯以上(件)	143	4	104	35
(%)	100.0	2.8	72.7	24.5

注 1） n=532
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×3表）

表8 飲酒量と父親の飲酒との関連

飲酒量	父親の飲酒			
	総数	飲まない	今は飲まない	飲んでいる
飲まない(件)	121	29	7	85
(%)	100.0	24.0	5.8	70.2
2杯以下(件)	221	20	11	190
(%)	100.0	9.0	5.0	86.0
3杯以上(件)	125	11	10	104
(%)	100.0	8.8	8.0	83.2

注 1） n=467
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×3表）

表9 飲酒量と母親の飲酒との関連

飲酒量	母親の飲酒			
	総数	飲まない	今は飲まない	飲んでいる
飲まない(件)	116	71	6	39
(%)	100.0	61.2	5.2	33.6
2杯以下(件)	230	83	26	121
(%)	100.0	36.1	11.3	52.6
3杯以上(件)	135	50	15	70
(%)	100.0	37.0	11.1	51.9

注 1） n=481
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×3表）

表10 飲酒量と兄の飲酒との関連

飲酒量	兄の飲酒		
	総数	酒を飲まない兄がいる	酒を飲む兄がいる
飲まない(件)	47	22	25
(%)	100.0	46.8	53.2
2杯以下(件)	92	36	56
(%)	100.0	39.1	60.9
3杯以上(件)	59	11	48
(%)	100.0	18.6	81.4

注 1） n=198
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×2表）

表11 飲酒量と姉の飲酒との関連

飲酒量	姉の飲酒		
	総数	酒を飲まない姉がいる	酒を飲む姉がいる
飲まない(件)	50	35	15
(%)	100.0	70.0	30.0
2杯以下(件)	98	45	53
(%)	100.0	45.9	54.1
3杯以上(件)	58	12	46
(%)	100.0	20.7	79.3

注 1） n=206
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×2表）

いない」は15.7%であった（表13）。「2杯以下」と回答しているもののうちでは，「参加している」が80.9%で「参加していない」が19.1%，「3杯以上」では，「参加している」が60.3%，「参加していない」が39.7%と，飲酒量が増えるにつれて，クラブ活動に参加しているものの割合は低く，参加していないものの割合は高い傾向だった（表13）。

10） 飲酒量と飲酒教育との関連

飲酒量と飲酒教育との関連では，有意な差は認められなかったが，「飲まない」と回答しているものに比べて，「2杯以下」，「3杯以上」と回答したものの方が，飲酒教育を受けたと回答するものの割合が増加していた（表14）。

11） 「親に見つかったことがある」と「親に叱られたことがある」との関連

飲酒を親に見つかったことがあるかについて，「はい」と回答したもののうち，飲酒について親に叱られたことが「ある」と回答したものは18.6%，「ない」は，81.4%，と親に叱られたことがないものの割合が高かった（表15）。

Ⅳ 考　　察

本研究は，A島の中高生の飲酒行動に関するアンケート調査と，アンケート調査の対象校の養護教諭へのインタビュー調査から，離島という特殊な環境を全国調査の結果と比較することができた。また，養護教諭の印象と実態の比較を行い，養護教諭の印象をある程度客観的に説明することができた。

養護教諭は，飲酒問題を指導する上で困っていることとして，親の意識について指摘し，未成年者の飲酒に対して寛容な地域社会であると述べている。今回のアンケート調査では，親から飲酒をすすめられたことのある生徒は，全国調査と比較して低い割合だったが，飲酒を「親に見つかったことがある」と「親に叱られたことがある」との関連において，飲酒を親に見つかっても叱られたことのないものの割合が81.4%であった。これは，直接的に飲酒をすすめなくても，間接的に飲酒を認めているといえ，子どもたちにとって親は飲酒を抑制する因子にな

表12 飲酒量と友達の飲酒との関連

飲酒量	友達の飲酒		
	総数	酒を飲む友達はいない	酒を飲む友達がいる
飲まない(件)	124	77	47
(%)	100.0	62.1	37.9
2杯以下(件)	245	82	163
(%)	100.0	33.5	66.5
3杯以上(件)	140	5	135
(%)	100.0	3.6	96.4

注 1） n=509
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×2表）

表13 飲酒量とクラブ活動との関連

飲酒量	クラブ活動		
	総数	参加している	参加していない
飲まない(件)	134	113	21
(%)	100.0	84.3	15.7
2杯以下(件)	257	208	49
(%)	100.0	80.9	19.1
3杯以上(件)	141	85	56
(%)	100.0	60.3	39.7

注 1） n=532
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×2表）

表14 飲酒量と飲酒教育との関連

飲酒量	飲酒教育			
	総数	ある	ない	おぼえていない
飲まない(件)	131	74	16	41
(%)	100.0	56.5	12.2	31.3
2杯以下(件)	248	155	11	82
(%)	100.0	62.5	4.4	33.1
3杯以上(件)	138	89	12	37
(%)	100.0	64.5	8.7	26.8

注 1） n=517
2） 検定：χ^2test；P>0.05（3×3表）

表15 親に見つかったことがあると親に叱られたことがあるとの関連

親に見つかったことがある	親に叱られたことがある		
	総数	ない	ある
はい(件)	161	131	30
(%)	100.0	81.4	18.6
いいえ(件)	319	304	15
(%)	100.0	95.3	4.7
おぼえていない(件)	41	40	1
(%)	100.0	97.6	2.4

注 1） n=521
2） 検定：χ^2test；P<0.01（3×2表）

っていないと推測される。神奈川県のある公立高校において，全校生徒とPTAとに同時調査を行った結果が報告されているが，その調査では，「子どもが飲酒して帰宅したときに親がどういう態度を示すか」という質問に対して，「度が過ぎないように注意する（注意される）」という回答が親も子どもも一番多かった[4]とある。これは少しだけなら飲んで良いと親が子どもに言っているとも考えられ，子どもの飲酒に対する親の黙認的態度は，A島に限ったことではないといえる。こうした親の態度について，鈴木は「親を含めた社会全体が，子どもの飲酒に対してどのような態度をとることが望ましいのかわからなくなっていることが原因と考えられる。」[5]と述べている。今回の調査において，飲酒教育だけでは解決できない大きな問題といえる。そして，飲酒量と家族（父親，母親，兄，姉）の飲酒との関連を見ても，飲酒量の多いものは，家族が飲酒しているものが多く，家庭環境の影響が考えられる(表8，9，10，11)。また，初めて飲酒した年齢について，全国調査と比較すると，「8歳以下」と回答したものの割合が高いことから，A島の子どもたちにとって，アルコールはより身近な存在とも考えられる。これらのことから，今後，親自身が子どもの飲酒に対して，どのように考えているのか，意識調査が必要と考えられる。未成年者の飲酒に対する親たちの意識に問題があるのか，あるいは親たちは注意しているが，子どもたちに伝わらないという，家庭内でのコミュニケーションに問題があるのか，別の視点での調査や検討も今後の課題といえるだろう。

また，今回のインタビューでは，養護教諭は，生徒から飲酒についての話を，日常的によく聞くということであった。しかし，飲酒頻度を全国調査と比較してみても，「飲まない」ものの割合は中学，高校ともにわずかだがA島の方が高く，島だからといって，特に飲酒する生徒の数が多いということではないといえる。しかし，全国調査の飲酒率は，欧米の調査結果と比較すると決して低くはなく，アメリカ合衆国の調査結果とほぼ同じレベルであり，欧米諸国の中では中位に位置する[6]。従って，全国調査と同じくらいであることが，決して良いということではないといえる。一方，飲酒量に着目すると1回の飲酒で「コップに3杯以上」と回答するものの割合は，全国調査と比較して高く，飲酒量と飲酒頻度との関連を見ると，「コップに3杯以上」と回答するもののうち，「週1回以上」の頻度で飲んでいるものが24.5%であった。この結果から，養護教諭のいう，A島の生徒に対する印象は，生徒全体の中での飲酒者が多いというわけではなく，一部の飲酒する生徒の飲酒頻度が高く，また飲酒量も多いためであると言えるだろう。つまり，A島の中高生の飲酒問題が多く感じられるのは，一部の飲酒する生徒が頻回に大量に飲酒するためであると考えられる。このことは，リスクの高い飲酒をしているものが多いということであり，こうした飲酒が，実は大きな問題であるといえる。飲酒頻度と飲酒量の2つのパラメーターから問題飲酒を抽出するスケール，QFスケール（Quantity-Frequency Scale）[4]によると「コップ3杯以上」で「週1回以上」の飲酒は，問題飲酒群に分類される。問題飲酒群とは飲酒頻度，飲酒量ともに高いグループであり，精神的，身体的，社会的にアルコールのリスクにさらされている子どもといえる[4]。未成年者の問題飲酒群はアルコール依存症の予備軍と考えることができ，ヤングアルコホリックにつながることが考えられる[7]。こうした子どもたちに対してどのように対応していくのかが課題といえる。

今回のアンケート調査の結果では飲酒教育について，受けたことが「ある」と回答しているもののうち，1回の飲酒が「コップに3杯以上」と回答するものが多いことや，初めて飲酒した年齢が「8歳以下」と回答したものも多いこと，また，インタビュー調査での飲酒教育に関する学校の状況から，飲酒教育の時期やあり方についての検討が必要といえる。子どもの飲酒問題について，飲酒は法律で禁止されているからという，いわゆる非行対策としてだけではなく，飲酒することによる健康への影響という自らの健康管理の問題としてとらえる視点は大切であ

る。つまり，非難したり，罰したりすることではなく，子ども達自身が自らの健康と生き方の問題としてとらえていけるように対応していくことが大切であるといえる。

今回のインタビュー調査の結果から，養護教諭は保護者にもアルコール問題があるときなど，学校のみでは対応できずに地域との連携の必要性を感じている。また，保健所に期待することでは，情報提供や親たちへの啓発，関係機関のネットワークづくりなどがあった。菊地はアルコール問題に対する保健所の役割について，①アルコール依存症者やその家族，自助グループなどに対する支援活動，②アルコールによる「からだ」や「こころ」，「社会的」問題の発生予防，③アルコールに関する情報の収集と施策化，④市町村支援と関係機関の調整，危機管理[2]，をあげている。また，岩崎は，酒害の啓発活動について，一次予防が遅れていることを指摘し，「今後の保健所における酒害予防対策の中で最も力を入れなければならない点である。」[8]と述べている。A島の保健所では，二次予防，三次予防に力をいれていた。社会資源の乏しい離島では，アルコール問題について保健所のみが唯一といえる相談機関で，問題が深刻化してからの発見も多く，またアルコールミーティングへの参加者の減少など，保健所のみの支援では限界に来ていると考えられる。A島において，今後，子どもの飲酒に対する親への啓発や未成年者の問題飲酒群への対応など，一次予防にも力をいれ，アルコール問題に対応していくには，学校や保健所のみで問題を抱え込まず，関係機関の連携において問題解決をすすめていくことが必要だといえる。そのためには，まず，関係機関のネットワークづくりの推進が重要な課題といえるだろう。

V 結　論

これらの結果から，A島が特にアルコールに対して寛容な環境であると断言はできないが，少なくとも子ども達から見た親は，子ども達の飲酒に対して寛容であるといえる。今後，親自身が子どもの飲酒に対してどのように考えているか意識調査が必要といえる。

また，リスクの高い飲酒をしている中高生が多く，このような子ども達に対して，具体的にどのような指導や支援を行っていくのか，更なる調査及び検討が必要である。そして，保健所においては地域全体でアルコール関連問題に対応していくネットワークづくりが重要な課題といえる。

謝辞

稿を終えるにあたり，本研究に多大なご理解とご協力をいただきましたA島町立中学校，都立A高等学校の校長及び養護教諭の皆様，そして担任および生徒の皆様，東京都島しょ保健所A出張所の皆様，鳥取大学医学部衛生学の尾崎米厚先生，国立公衆衛生院疫学部の簑輪眞澄先生に心より厚くお礼申し上げます。また終始暖かくご指導くださいました国立公衆衛生院公衆衛生行政学部の大井田隆先生及び諸先生方に心より感謝いたします。

文　献

1）上野美保．A島の子ども達をとりまく飲酒事業．東京都養護教諭研究会編．会誌48号．東京：2000.
2）菊地頌子．酒害相談事業の実際．こころの科学 2000；91：86-90.
3）「未成年者の飲酒行動に関する実態調査」研究班．1996年度未成年者の飲酒行動に関する全国調査報告書．東京：1997.
4）鈴木健二．未成年者のアルコール問題．樋口進編．アルコール臨床研究のフロントライン．東京：厚健出版，1996；45-61.
5）鈴木健二．子どもの飲酒があぶない．東京：東峰書房，1995.
6）尾崎米厚，簑輪眞澄，鈴木健二，他．中高生の飲酒行動に関する全国調査．日本公衛誌 1999；46：883-93.
7）鈴木健二．ヤングアルコホリックとAC．こころの科学 2000；91：80-5.
8）岩崎正人．酒害の啓発活動の現状．河野裕明編．我が国のアルコール関連問題の現状―アルコール白書―．東京：厚健出版，1993；193-205.
9）鈴木健二．高校生における飲酒問題．河野裕明編．我が国のアルコール関連問題の現状―アルコール白書―．東京：厚健出版，1993；55-80.
10）川畑徹朗，中村正和，大島明，他．青少年の喫煙・飲酒行動―Japan Know Your Body Studyの結果より―．日本公衛誌 1991；38：885-99.
11）阿部真理子．アルコール健康教育の実態．河野裕明編．我が国のアルコール関連問題の現状―アルコール白書―．東京：厚健出版，1993；207-27.